

JTE と ALT が児童生徒の卒業時に求める英語熟達度への意識調査 —テキストマイニングを援用して—

Differences in Expected English Achievements Level between JTEs and ALTs: Qualitative and Quantitative Analysis Adopting Text Mining

佐藤 剛*・芦田 七海**・川元 青空**・石神 響**
Tsuyoshi SATO*・Nanami ASHITA**・Sora KAWAMOTO**・Hibiki ISHIGAMI**

佐藤 李子**・清水 咲良**・羽田 瑛里**
Riko SATO**・Sakura SHIMIZU**・Eri HANEDA**

要 旨（佐藤）

本稿は、日本人英語教師（JTE）と外国語指導助手（ALT）が卒業時に児童・生徒に期待する熟達度について、その類似点および相違点を比較するものである。その結果、JTE はリスニングとリーディングについて、英文の概要や要点を捉えることを求めていること、スピーキング（やりとり）については即興性を求める一方、スピーキング（発表）については発音など正確さを求める傾向にあることが示された。またライティングについては、入試を意識した特徴語が抽出された。それに対して ALT は間違いがあったとしても、より基礎的なでシンプルな表現を用いて、自信をもって英語を使うことを求めることが結果として示された。このような結果から、効果的なチームティーチングの実現のためには、JTE と ALT の両者が児童生徒に求める到達度について、共通理解を持った上で授業に臨むこと、および両者が学習指導要領に示された目標を十分に理解することが重要であることが示唆された。

キーワード：ALT JTE 到達度 意識調査

1 はじめに

2020年度より小学校の新学習指導要領が本格実施となり、5・6年生に対して教科としての外国語の授業が、3・4年生に対しては外国語活動が開始されるなど、英語教育への関心が高まっている。よりコミュニケーション能力を育成することを目指した今後の英語授業において、日本人英語教師（JTE）だけでなく、外国語指導助手（ALT）と協力して授業を行うチームティーチングの形態で実施される機会がますます増えていくことが予想される。JTE と ALT という異なる立場や指導観を持つ2人の教師がひとつの授業を行う上で、その効果を最大限に引き出すには、相互理解が不可欠である。特に、「卒業時、児童・生徒達にど

れくらいの英語の力が身につけてほしいか」という卒業時の熟達度についての意思共有は、授業設計の根幹であり、授業展開や教材開発・選定に大きく関係する要因である。しかし、ALT が日本の英語教室に導入されて30年以上経った今でも、JTE と ALT とが卒業時に期待する熟達度について、十分な意思共有ができていないとは断言しがたい。また、当該分野において実証的な研究が十分に行われてこなかったのも事実である。

そこで、本研究は卒業時に児童・生徒に求める熟達度について、JTE と ALT に自由記述式のアンケート調査を実施し、その回答をテキストマイニングを援用して分析することで、その類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

* 弘前大学教育学部座
Department of English Education, Faculty of Education, Hirosaki University
** 弘前大学教育学部学校教育教員養成課程
Teacher Training Division, Faculty of Education, Hirosaki University

2 先行研究

JTE と ALT が英語の授業についてのどのような意識を持っているのかについての研究は以下のようなものが挙げられる。上西 (1999) はチームティーチングをベースにしたオーラル・コミュニケーションの授業に関して、JTE と ALT がどのような意識を持っているのかについて、19人の JTE と11人の ALT を対象にアンケート調査を行った。その結果、両者に共通するものとしては、以下のようなものが挙げられた。

- (1) よりよい人間関係がチームティーチングを成功させるための秘訣である
- (2) 生徒に聞く、話す活動をもっとさせる必要がある
- (3) 教材開発を積極的にすべきである
- (4) チームティーチング 授業について全般的に効果があり、満足している

反対に意識の違いが見られたものとしては以下のようなものが挙げられた。

- (1) ALT の方がオーラル中心の授業に対してより満足している
- (2) ALT の方が、チームティーチングの中で生徒の語彙力をもっとつける必要があると感じている
- (3) ALT の方が、オーラル中心の授業が効果を上げていると思っている
- (4) JTE の方が、より綿密な教案の検討が必要と感じている

その上で JTE と ALT が双方の思いを尊重することで、よりよい人間関係を構築し、チームティーチングを通して生徒のために効果的なオーラル中心の授業を展開していく必要があると結論づけている。

田邊 (2010) は小学校の学級担任はチームティーチングを行う際にそれぞれが互いに何を要求し、何を期待しているのか、そして、要求する内容やその度合いにどのような差があるのかについてアンケート調査を実施した。田邊 (2010) は、ALT と日本人指導助手の各グループの12項目から、「授業作りと進行」・「生きた英語や異文化理解の情報源」・「ALT への関わりやすさ」・「英語活動指導助手としての価値」の4つの因子を得た。ALT と日本人指導助手に共通する因子について、両者に統計的に有意な差異が見られるか検証した。その結果、学級担任は日本人指導助手に対して、授業の準備段階において、または授業運営において、より積極的に関わることを求めていることが分かった。一方 ALT に対しては、英語力を補うだけでなく、異文化理解に関する暗示的知識の提唱者として

の価値や英語を学ぶ必然性の演出についても期待している部分大きいと捉えられる結果であった。

学習者に期待する到達度について調査した研究もおこなわれている。小野 (2009) は小学校英語活動における小学校段階に期待される到達度に関して、小学校教員と中学校教員がどのように思っているのかについて、小学校教員128名と中学校英語科教員119名を対象にアンケート調査を行った。その結果、聞くこと、話すこと、読むことに関してはいずれも小学校教員の方が中学校教員よりも高い到達度を期待していることが明らかとなった。書くことについては両者とも文字程度までを期待していた。また、小学校教員は英語コミュニケーションへの関心・意欲・態度の育成を重視しているのに対し、中学校英語科教員は英語学習への関心・意欲・態度を重視している違いが見られた。

小銭 (2009) は、小学校教員、中学校英語科教員を対象に、小学校卒業時点 (中学校入学時) の児童に求める英語の到達度についてアンケート調査を行った。その結果、小学校教員は中学校英語科教員に比べてより高い到達度を期待しており、特に「聞くこと」「話すこと」について小学校教員は、定型表現以上の英語を用いる程度までを目標としていることがわかった。

3 リサーチクエスチョン

本研究は、より効果的なチームティーチングの実現のために、JTE および ALT が児童・生徒に卒業時に求める英語熟達度について、両者の類似点と相違点を明らかにするものである。それにあたり、以下の3つのリサーチクエスチョン (RQs) を設定した。

- RQ1 JTE は自分が指導する学習者に対し、卒業時に技能別にどのような熟達度を期待しているか
- RQ2 ALT は自分が指導する学習者に対し、卒業時に技能別にどのような熟達度を期待しているか
- RQ3 JTE と ALT の考える卒業時に期待する熟達度にはどのような類似点・相違点があるか

4 研究方法

4.1 調査協力者

本研究の協力者は、県内の小学校、中学校、高校に勤務する ALT および JTE である。アンケートへの協力を得られた ALT は23人、JTE は12人である。

4.2 マテリアル

本研究では、付録に示す、自由記述式のアンケートを使用した。卒業時に期待する英語熟達度をリスニング (L)・スピーキング (やりとり) (SI)・スピーキング (発表) (SP)・リスニング (R)・ライティング (W) の5領域ごとに、自由記述方式での回答を依頼した。このとき、JTE には日本語で、ALT には英語での回答を依頼した。

4.3 実験手続き

上記 4.2 に挙げたアンケートを分析するにあたって、以下のような手続きを採用した。まず、アンケートに記載された回答、校種 (小中高)、JTE/ALT、技能 (L, SI, SP, R, W) を項目別にそれぞれ入力し、CSV ファイルの形式でデータ化した。次に、回答データを以下のようなスクリーニング作業を行った。

- (1) 数字の表記を半角数字に統一する。(e.g. nine → 9)
- (2) 表現の揺らぎを統一する。(e.g. コミュニケーションする、コミュニケーションをとる→コミュニケーションをとる)
- (3) JTE の回答の文末は「～こと」で統一する。(e.g. まとまった英文を聞いて、その概要を正確に把握すること)
- (4) ALT の回答は動詞の原形から始まる形に統一する。(e.g. *speak confidently even if not perfect*)

4.4 データ分析

本研究で採用したデータ分析方法は、以下に示すとおりである。まず、JTE と ALT それぞれについて、データの総抽出語数と異なり語数の頻度を算出し、高頻度語リストを作成した。その傾向と特徴から、それぞれの期待する熟達度を比較・検討した。

次に、それぞれ特徴語分析、階層語クラスター分析、共起ネットワーク分析を行い、それぞれのグループが期待する卒業時に期待する英語熟達度についての分析を行った。使用したテキストマイニングソフトは、KH Coder (version 3.Beta.01e) (樋口, 2020) である。

佐野&李 (2007) は自由記述式のアンケート分析における KH Coder の有効性について以下のようにまとめている。

- (1) 無償でウェブサイトから入手可能で、インストールから分析まで簡単なマウス操作のみで使用でき

る。

- (2) データ抽出機能に優れ、テキストから様々な情報を簡単に取り出すことができる。
- (3) 他のデータ分析アプリケーション (Excel など) との連携性に優れている。
- (4) 「飲んだ」「飲んでいる」などの活用が出てきても解析情報を基にデータ抽出を行うため、すべての活用形を原形をキーワードとして入力することで抽出することも可能である。

このように、回答者から自由な意見を引き出すことのできる自由記述式のアンケートの回答を、客観性と信頼性をもって分析することのできる KH Coder を使ったテキストマイニングは近年多くの研究で活用されている。

5 結果と考察

表 1 は、データの総抽出語数、異なり語数を、JTE、ALT 別に示したものである。

表 1 データの総抽出語数、異なり語数

| FILE | 総抽出語数 | 異なり語数 |
|--------------|-------|-------|
| 日本人英語教師(JTE) | 1,129 | 254 |
| 外国語指導助手(ALT) | 2,224 | 437 |

Note. JTEは日本語で、ALTは英語を使ってそれぞれ回答

次に、抽出語リストの機能を使って、表 2 に示すとおり、JTE と ALT の回答に見られる高頻度語リストを作成し、それぞれのグループから得られた解答を比較する。

表 2 から、JTE のアンケート結果には「話す」「書く」が「聞く」、「読む」よりも高頻度で出現していることが分かる。一方、ALT の回答には、「read」、「write」、「speak」、「listen」の順で出現していることから、JTE はより発表することを重要視する傾向にある一方、ALT は書き言葉をより重視しているのではないかと考えられる。一般的には日本人教師が書き言葉を、ネイティブスピーカーである ALT が話し言葉を重視すると考えられがちであるが、本研究は反対の傾向を示す結果となった。

さらに、JTE の回答には、「自分」、「意見」、「身近」、「話題」、「ある程度」、「内容」、「トピック」などの語が高頻度で出現していることから、社会的な話題や身近なトピックについて、自分の意見を話したり書いたりできるようになることを、卒業時の到達目標と考え

表2 JTEとALTの回答に見られる高頻度語リスト

| JTE | | ALT | |
|------|------|-------------------|------|
| 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 |
| 自分 | 24 | basic | 27 |
| 英文 | 15 | Understand | 27 |
| 話す | 13 | English | 24 |
| 書く | 12 | Read | 20 |
| 相手 | 12 | simple | 17 |
| 意見 | 10 | Write | 16 |
| 話題 | 10 | words | 13 |
| 英語 | 9 | conversation | 11 |
| 内容 | 9 | Have | 11 |
| 考え | 8 | Like | 10 |
| 聞く | 8 | Speak | 9 |
| 理解 | 8 | Listen | 8 |
| 身近 | 7 | sentences | 8 |
| 概要 | 6 | short | 8 |
| 読む | 6 | self-introduction | 7 |
| 簡単 | 5 | questions | 7 |
| 質問 | 5 | conversations | 6 |
| 正しい | 5 | answer | 5 |
| 伝える | 5 | Confidently | 5 |
| 与える | 5 | name | 5 |
| ある程度 | 4 | native | 5 |
| トピック | 4 | Talk | 5 |
| 会話 | 4 | thoughts | 5 |
| 社会 | 4 | alphabet, | 4 |
| 述べる | 4 | communicate | 4 |
| 即興 | 4 | confident | 4 |
| 読み取る | 4 | Enough | 4 |

ている傾向が見られる。

ALTの回答には「basic」、「simple」、「word」、「sentence」、「short」の語が高頻度で出現しており、より基礎的な単語や文を書いたり、読んだりできることを卒業時の到達度と捉えているのではないかと考えられる。

上記のことから、指導している学習者にJTEが身近な話題や社会的なトピックについて自己表現できること求めている一方、ALTは簡単で基礎的な単語や文など、よりローカルなレベルで卒業時の到達度を想定しているのではないかということが推測される。このようにアンケートの全体的な分析においても、JTEとALTが児童・生徒に卒業時に求める熟達度について差異が見られた。この考察の妥当性を検証するため、以下、JTEとALTの回答別により詳細な分析を行う。

5.1 JTEの調査結果と考察

5.1.1 特徴語分析

上記に述べた考察の妥当性を検証するために、アンケート結果を特徴語分析・階層的クラスター分析・共起ネットワークを用いてJTEとALTそれぞれ詳細な分析を行う。表3はJTEのアンケート回答の特徴語

をまとめたものである。

表3 JTEのアンケートに見られる特徴語

| | L | R | Si | SP | | | |
|-------|------|------|------|------|------|----|------|
| 聞く | .539 | 読む | .500 | やり取り | .250 | 話す | .316 |
| 話す | .250 | 読み取る | .333 | 応答 | .250 | 自分 | .259 |
| 理解 | .250 | 概要 | .286 | 会話 | .231 | 発表 | .250 |
| 英文 | .238 | 英文 | .238 | 相手 | .222 | 身近 | .188 |
| ある程度 | .231 | 理解 | .177 | 意見 | .167 | 考え | .188 |
| 内容 | .167 | 内容 | .167 | 続ける | .167 | 作成 | .167 |
| 話題 | .167 | 大切 | .167 | 適切 | .167 | 発音 | .167 |
| 聞き取る | .167 | 教科書 | .167 | 即興 | .143 | 準備 | .154 |
| リスニング | .167 | 部分 | .167 | 質問 | .143 | 社会 | .143 |
| 概要 | .125 | あらすじ | .154 | 日常 | .143 | 簡単 | .133 |
| W | | | | | | | |
| 書く | .846 | | | | | | |
| 自分 | .308 | | | | | | |
| 文法 | .250 | | | | | | |
| 意見 | .235 | | | | | | |
| 相手 | .222 | | | | | | |
| 語順 | .167 | | | | | | |
| 気を付け | .154 | | | | | | |
| 入試 | .154 | | | | | | |
| 構成 | .154 | | | | | | |
| 伝える | .133 | | | | | | |

表3から、JTEの回答には以下のような特徴があることが分かる。まずは、受容的な技能であるリスニングとリーディングについては、類似した傾向が観察された。リスニングでは、話される英文の内容や話題、概要をある程度聞き取り、理解できることや重要な部分は正しく聞き取ることが目標とされている。同様にリーディングについては、英文の内容、概要、あらすじ、大切な部分を読み取り、理解することが目標であると考えている。つまりリスニングとリーディングの両者においてJTEが重視するのは、逐語訳のようなものではなく、概要や大切な情報の理解であることが分かる。

スピーキング（やりとり）については、相手の質問に適切に応答したり、即興で、簡単なことについて会話を続けたりできること、自分の意見を伝えることが目標であるとするJTEが多いが、スピーキング（発表）については、JTEの多くが、身近な出来事について、原稿を作成し発表の準備をして簡単な英文を発音にも気を付けてできるようになることが目標であると考えている。つまり、スピーキング（やりとり）については、スクリプトなど事前の用意がない状況で、即興性を求める一方、スピーキング（発表）では、事前の準備を許容する傾向にある。ただ、そのため、スピーキング発表においては発音などについて正確さを求める傾向が見られる。

最後にライティングについては、自分の意見を相手に伝えられるように文法や語順、構成にも気を付けて書くことができるようになることが目標であるとするJTEが多い。また、「入試」、「文法」、「語順」「構成」など、入試を意識した熟達度を求める傾向がみられることは、JTEの特徴である。入試に代表される試

験に対応する力をつけることは日本人英語教師にとってはもちろん、児童・生徒にとって重要な意味を持つことは言うまでもない。しかし、一方で日本語ばかりを使って文法の説明を行うような授業や問題演習に終始する授業では ALT は「ヒューマンテープレコーダー」と呼ばれるような例文を読むだけになってしまうことが多く、児童・生徒のコミュニケーション能力の育成に資する効果的なチームティーチングの実現は難しい。JTE と ALT の両者がお互いの考えを十分に理解し、そのバランスをいかにとるかが、効果的なチームティーチングの実現には不可欠である。

5.1.2 階層的クラスター分析

KH Coder の階層的クラスター分析の機能を使って、図 1 に示すとおり、JTE の回答についてのデンドログラム（樹形図）を作成した。

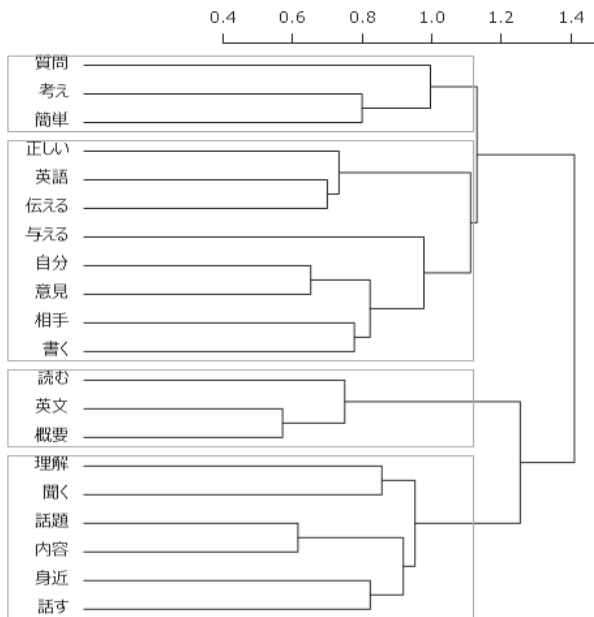


図 1. JTE の回答のデンドログラム（樹形図）

クラスター分析とは、データが持つ情報を手掛かりにして、距離が近いデータ動詞をまとめてクラスター（群・集落）を構成する統計手法である（石川他, 2010）。図 1 によると、JTE のアンケート結果は以下の 4 つのクラスターに分類される。「考え・簡単・質問」から構成される相手に質問をするに関するクラスター、「正しい・英語・伝える・与える・自分・意見・相手・書く」から構成される正しい英文を相手に伝えるように書くことに関するクラスター、「読む・英文・概要」から構成される読むことに関連するクラスター、そして「理解・聞く・話題・内容・身近・話

す」から構成させる、インタラクションに関するクラスターである。

5.1.3 共起ネットワーク

以下の図 2 は、JTE の回答結果について、共起ネットワーク図を描いたものである。

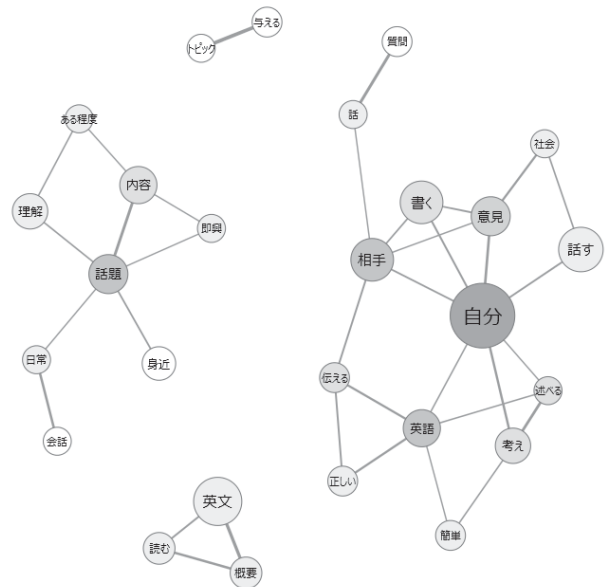


図 2. JTE の回答の共起ネットワーク図

頻度は 4、描画数の 35 に設定した。図 2 では「自分」の頻度が最も高いことが分かる。そしてその「自分」と結びつきが強いのは、「話す」と「書く」である。自分の意見や考えを話したり、書いたりできるようになること求められている。

書くことに関しては、特徴語分析、階層的クラスター分析と同様、正確さを求めていることが示されている。相手に伝わるように書くためには、正確な文法や語順で書けるようになってほしいという JTE の考えがあると考えられる。

「ある程度」と「理解」の結びつきが強い。つまり JTE は、一言一句を理解するのではなく、重要な部分を理解することを求めていると考えられる。同様に、読むことに関しても、英文の概要を読めるようになることが求められていると言える。

以上の分析から JTE は、自分が担当する児童・生徒に対して、以下のようなことを卒業時に期待していると考えられる。

- (1) リスニングやリーディングでは内容の概要や話題の理解を目標とする。

- (2) スピーキング (やりとり) では相手との会話や、やり取りを即興で続けることを目標とする。
- (3) スピーキング (発表) では身近な出来事を前もって準備をして発音にも気を付けながら発表することを目標とする。
- (4) ライティングでは自分の意見を文法や語順に気を付けて、相手に伝えられるように書くことを目標とする。また、入試に対応できるよう正確な英文を書けるようになることを目標としている。

5.2 ALTの調査結果と分析

5.2.1 特徴語分析

ALTの回答の特徴語は以下の表4に示すとおりである。

表4 ALTのアンケートに見られる特徴語

| L | | R | | SI | |
|-------------|------|-----------|------|------------|------|
| Understan | .600 | Read | .750 | have | .172 |
| Listen | .304 | words | .207 | conversati | .133 |
| English | .270 | basic | .167 | topics | .125 |
| conversati | .259 | English | .146 | Do | .125 |
| basic | .167 | they | .133 | answer | .120 |
| simple | .147 | Recognize | .130 | with | .118 |
| native | .120 | some | .120 | conversati | .115 |
| questions | .111 | sentences | .107 | simple | .114 |
| Pick | .087 | Can | .097 | about | .088 |
| up | .087 | have | .097 | like? | .087 |
| SP | | W | | | |
| Speak | .261 | Write | .565 | | |
| their | .207 | their | .194 | | |
| Confidentl | .182 | spell | .174 | | |
| with | .161 | words | .129 | | |
| confident | .136 | name | .120 | | |
| Talk | .130 | simple | .114 | | |
| even | .130 | short | .107 | | |
| thoughts | .130 | like | .107 | | |
| If | .125 | about | .088 | | |
| introductic | .120 | it | .087 | | |

リスニングについては、ネイティブの話す、基本的かつ単純な会話や質問を聞き、その内容を理解できるようになることを目標と考えていることが分かる。また聞こえてくる英語の中から重要な単語を聞き分ける能力も求めている。リーディングについては、基本的な単語や文から成る文章を読んで理解できるようになることを目標と考えている。また読み物の教材として、子供向けの簡単な本や漫画を挙げている回答が複数見られた。スピーキング (やり取り) については、特定の話題について、単純な質疑応答をしながら会話ができるようになることを目標と考えている。スピーキング (発表) については、完璧でなくても自信を持って自己紹介をしたり自分の考えを述べたりすることができるようになることを目標と考えている。そし

て、ライティングについては、基本的な単語を使って短く単純な文章を書けるようになることを目標と考えている。またスペルミスなどの間違いを恐れずに自分が本当に書きたいことを書くことが大切であるという傾向も観察される。

5.2.2 階層的クラスター分析

階層クラスター分析によると、ALTの回答は6つのグループに分けられる。1つ目のクラスターは、doとyou、2つ目のクラスターにはI, like, can, haveから構成されている。ここから、ALTは児童・生徒にDo youを使って相手に尋ねたり、自分が好きなこと、できること、そして自分が持っているものについて伝えることができるようになってほしいと考えていると推測される。

3つ目のクラスターを構成するデータから、*Listen to and understand, From a/one's conversation* という目標を読み取ることができる。つまりリスニングにおいてできるようになってほしいことに関するクラスターである。ALTは児童・生徒に会話を聞いて理解できるようになってほしいと考えていることが推測される。

4つ目のクラスターには、*write, as, introduction, conversations, their, own, short, about, or* が含まれる。これはライティングにおいてできるようになってほしいことに関するクラスターである。ALTは児童・生徒に自分自身のことについての短い紹介文が書けるようになってほしいと考えていることが推測される。

5つ目のクラスターには、*read, basic, words, simple, sentences* が含まれており、ALTは基本的な単語や簡単な文を読めるようになってほしいと考えていることが分かる。また、*is, of, the* のクラスターが何を意味しているのか分析するために、ALTの回答データのコンコードダンスラインを参照したところ、*Know the alphabet, sound out basic words. Soして、Days and months of the year weather and time giving directions how are you my name is.* という文の中で、使用されていた。ここから、簡単な単語の具体的な例を指していることが考えられる。ALTは、日付や月の名前を表す言葉を使うことができるようになってほしいと考えていることが伺える。

6つ目のクラスターには、*if, they, speak, with, more* と *in, English, be, at, question* から構成されるクラスターである。*if, they, speak, with, more* は、*speak more comfortably, with more enjoyment and confidence.* という回答から抽出されたものである。ALTは、児童・生徒にもっと自信をもって楽しみながら気楽に話してほしいと考えているこ

とが示唆された。もう一方のクラスター *in, English, be, at, question* は、*Be confident when giving short presentation in English and answer questions about their presentation* という回答から抽出されたものであった。ここから ALT は児童・生徒に自信をもって英語で短いプレゼンテーションをし、プレゼンテーションについての質問に答えられるようになってほしいと考えていることが推測される。つまり、両者に共通してみられるキーワードは「自信」である。以上のことから、ALT は児童・生徒が自信を持ってスピーキングを行うことができるようになることを重視していることが考えられる。

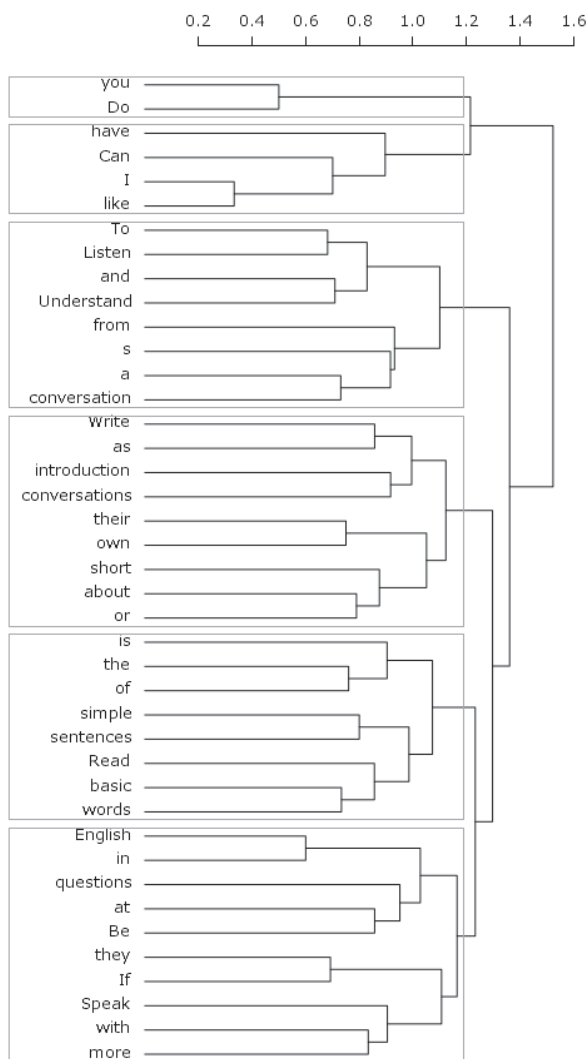


図3. ALT の回答のデンドログラム (樹形図)

5.2.3 共起ネットワーク

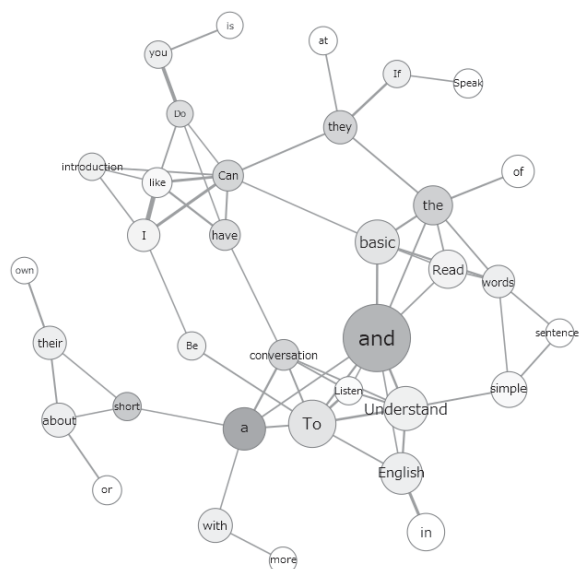


図4. ALT の回答の共起ネットワーク図

頻度は5、描画数の60の共起ネットワークに示した。共起ネットワークから、ALT が児童生徒に卒業時に期待する熟達度について、以下のような傾向が観察される。まずは、スピーキング (やりとり) について、*How are you?* や名前など、質問したり答えたりできること、次に、*like* や *have* を使って自分に関することを発表できること、基本的な単語や英語を理解すること、さらには自分の考えを表現することを求める傾向がみられることである。

注目すべき点は、すべてのネットワークの中心に位置する *even if* である。このコンコーダンスラインを参照した結果、以下の例に示すように、たとえ間違いがあっても、シンプルなものでもよいので、英語を使うことを、ALT は求めていることが分かる。

- speak clearly even if they have mistakes
- they can write what they really want to say, even if it is simplified
- I'd like them to be able to try to spell what they hear (even if it's not correct).
- Present in English even if there are mistakes.

また、*talk confident* というキーワードが抽出されていることから、ALT は間違ってもいいので、自信をもって英語を使うことを求めていることが示唆されている。

上記の特徴語分析、階層的クラスター分析、共起ネットワーク図から、ALT は共通して、難しい英語

ではなく、むしろ基本的またはシンプルな単語や表現を使って、間違いを恐れず、自信をもって英語を使ってほしいと願っていることが分かる。これは、受容的な技能であるリスニングやリーディングにおいても、算出的な技能であるスピーキングやライティングにおいても同様である。テストを目的として、長い英文を読んだり書かせたり、正確さを求めるのではなく、ネイティブスピーカーとして、簡単なものであったり基本的な表現を使って、コミュニケーションのツールとして英語を実際に使ってほしいと考えていることを示唆する結果となった。

6 まとめと教育的示唆

本研究は、効果的なチームティーチングの実現のために、JTEとALTが担当する児童・生徒に卒業時に求める熟達度について、テキストマイニングの手法を援用して調査・分析したものである。その結果、JTEはリスニングとリーディングについては、概要や要点を捉えるようになることを求めており、スピーキング（やりとり）については即興性を求める一方、スピーキング（発表）については発音など正確さを求める傾向にあること、さらにはライティングについては、入試を意識した熟達度をそれぞれ求めていることが特徴であることが示された。それに対してALTは間違いがあったとしても、より基礎的なでシンプルな表現を使って、自信をもって英語を使うことを卒業時に求めていることが示唆される結果となった。

両者を比較すると、JTEの方が、より高い熟達度レベルを求めているのではないかと考えられる。また、JTEの研究結果には「即興性」「相手意識」「概要を捉える」など、学習指導要領の内容が反映されていることも特徴のひとつである。学校教育である以上、学習指導要領の内容を理解してそれに準じた授業を展開しなければならない。ALTに対して、その内容を十分に説明し、共通理解をもって授業をあたることが、効果的なチームティーチングを実現する第一歩であろう。また、ALTを対象にした研修会などにおいても、学習指導要領について丁寧に解説し、理解を含める内容をより積極的に導入する必要があると考えられる。この研究が、委員会などでALTを対象とした研修会のプログラムを構成する際の一助となることを期待する。

また、ALTはネイティブスピーカーであるがゆえに、高度なコミュニケーションパフォーマンスを要求

していると一般的には考えられがちであるが、実際には基礎的な表現やシンプルな英語を使うことを重要視していることもこの研究によって明らかになったことのひとつである。基礎的な表現やシンプルな英語が、児童・生徒にとって重要であるということは、JTEとALTの両者に共通する考えである。小学校、中学校、高等学校のそれぞれにおける基礎的な表現とは何であるのか、JTEとALTのそれぞれの立場から検討することは、児童・生徒にとってはもちろん、JTEとALTにとっても意義のあることであろう。

最後に、本研究において、入試への対応をどのようにチームティーチングで実現するかという点が課題として示された。以前は、ALTとの時間はコミュニケーション活動、入試対策はJTEだけの時というように、チームティーチングと入試は別問題として考えられてきたように思われる。しかし、よりチームティーチングの機会が多くなることが予想される今後は、コミュニケーション活動を中心としたチームティーチングにおいても入試に対応できる能力を育成できる授業の在り方を模索していく必要があると考えられる。

7 謝辞

本研究に対して、お忙しい中研究会の合間を縫ってアンケートにご協力して下さったJTE、ALTの方々にご心より感謝申し上げます。

参考文献

- 石川慎一郎, 前田忠彦&山崎誠 (2010)『言語研究のための統計入門』くろしお出版.
- 上西幸治 (1999). 「ティーチングに関する調査・研究—JTEとALTの意識を比較して」『中国地区英語教育学会研究紀要』第29巻, 39-47.
- 佐藤 (2018) 「小学生のための受容語彙リストの開発」『JES Journal』第18巻, 36-51.
- 小銭恭子 (2009). 「小学校教員と中学校英語科教員が英語活動を通して児童に期待する到達度と小学校への英語導入に際しての課題に対する意識調査」『日本教科教育学会誌』第32巻, 71-80.
- 小銭恭子 (2009) 「小学校教員と中学校英語科教員が英語活動を通して児童に期待する到達度と小学校への英語導入に際しての課題に関する意識調査」『日本教科教育学会誌』第32巻, 第3号, 71-80.
- 佐野香織・李在鎬 (2007) 「KH Coderで何ができるか—日本語習得・日本語教育研究利用への示唆—」『言語文化と日本語教育33号』94-95.
- 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析—

内容分析の継承と発展を目指して― 第2版』ナカニシヤ出版.

(2020. 8.21受理)

付録1 アンケート (JTE 用)

令和1年11月8日

参加者のみなさま 弘前大学教育学部
佐藤 剛

卒業時に目標とする英語熟達度のイメージについてのアンケート

現在、児童・生徒が卒業する時にできることについて先生方がどのようなイメージを持っているのかについて調査をしております。つきましては、以下のアンケートにご協力をお願いします。また、メールアドレスをお知らせいただければ、調査・分析の結果を後日メールにてお知らせいたします。たくさんの方にご協力いただければ幸いです。

① 勤務先の校種
小学校 中学校 高等学校 大学 その他 ()

② 児童・生徒が卒業時にどのようなことができるようになってほしいかについてお知らせください。

【聞くこと】について
[] することができます。

【読むこと】について
[] することができます。

【話すこと (発表)】について
[] することができます。

【話すこと (やりとり)】について
[] することができます。

【書くこと】について
[] することができます。

付録2 アンケート (ALT 用)

Tsuyoshi Sato
Faculty of Education
Hiroaki University

Survey Questionnaire about Expected Achievement Level

This is a survey to identify teachers' expectations regarding what students should be able to do in English at respective graduation levels. Please respond freely and in depth to the prompt below. Thank you for your corporation.

① I am working at a(an)
Elementary School Junior high School High school University
Other ()

② When my students graduate, I want them to be able to... (continue for each area blow)

【Listening】
[]

【Reading】
[]

【Speaking (Presentation)】
[]

【Speaking (Interaction)】
[]

【Writing】について
[]